

平成21年 6月 17日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18720002
 研究課題名（和文） 悪と苦しみの倫理学
 研究課題名（英文） Ethics of Evil and Suffering
 研究代表者
 中 真生（NAKA MAO）
 神戸夙川学院大学・観光文化学部・准教授
 研究者番号：00401159

研究成果の概要：

悪と痛みという主題が、他なるものとの関係を探求するレヴィナス思想において、根本的な役割を果たしていることが明らかになった。また、他なるものとの関係という哲学的、倫理学的主題を、主体の身体、とりわけ痛みを被る身体の観点から考察する重要性を示すことができた。さらに、痛みや、痛みの観点から見られた悪という主題は、文献研究に収まらない性格をもつため、倫理学において、文献研究と実践研究を必然的に結びつける主題であることが示された。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,100,000	0	1,100,000
2007年度	1,100,000	0	1,100,000
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	330,000	3,630,000

研究分野：哲学・倫理学

科研費の分科・細目：哲学

キーワード：悪、痛み、他者

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究は、「悪と苦しみの倫理学」と題する広範な研究構想の一部を成すが、この研究計画は代表者が留学中の2001年に、博士論文計画の一環として構想された。ブリュッセル自由大学DEA超領域学科に提出したDEAの学位論文「*La souffrance chez Emmanuel Lévinas*」（同大学同学科に2003年提出）がその最初の成果である。帰国後、この学位論文を基に、これまで注目されることの少なかった、レヴィナスの特に初期の思

想に「痛み」の観点から切り込んだ論文が、「レヴィナスにおける痛みについて」（『フランス哲学思想研究』、日仏哲学会、2004年）である。

着想当初は、「痛み」という代表者自身の関心に基づく主題からは、レヴィナスの側面にしか切り結ぶことができないだろうと考え、この研究は主題に基づいて広くフランス倫理思想を縦断する研究になると想定していた。また代表者がかねてから計画している、フィールドワークを哲学・倫理研究に採り入れる試みに早くから取り組むことに

なると考えていた。ところがレヴィナス思想を「苦しみ」の観点から捉え直す研究を進めるうちに、苦しみという語こそ頻繁に用いないものの、苦しみは初期から晩年に至るまで「疲労」「労苦」「傷つきやすさ」と捉えられ方を変えつつ常に彼の思想を下支えするものであることが明らかになってきた。

さらにレヴィナスは苦しみを悪と独自の仕方結び付けることで、「全体性」や歴史、戦争を、彼の中心主題である「他者への倫理的関係」の観点から、その不当な側面を明らかにしていることが分かってきた。そこで、代表者も苦しみと密接に関わる限りでの悪の研究に力を入れ始めた。本研究計画も、苦しみだけでなく、苦しみと悪を研究の両軸とすることで、より広い視点と可能性を含むようになった。レヴィナス思想における悪の位置づけについてはすでに、「レヴィナスの《le mal》」に見る、他なるものとの関係についての考察—身体的苦しみをてがかりに」哲学会編『哲学雑誌 119 巻 791 号』2004 年にまとめている。

(2) 悪と苦しみを結び付け、レヴィナスを含めた西洋近現代哲学を縦断する精力的研究を行ったのは J.Porée である。「La philosophie à l'épreuve du mal」, J.Vrin, 1993、「Le Mal」, Armand Colin, 2000.の著作をはじめ数々の関連する雑誌論文がある。Porée のこれらの研究がレヴィナスから強い影響と着想を得たことは明らかだが、レヴィナスの名前を挙げることは少ない。Porée の研究にはレヴィナスの著作を丁寧に解釈する作業がないので、レヴィナス研究としては不十分である。また悪と苦しみに関わる多くの哲学者を、悪や苦しみの観点から参照する視野の広い研究には目を見張るものがあるが、例えばなぜ悪を苦しみと結び付けて考察するのかなどの疑問や批判に耐え得る思索は十分行われていない。

レヴィナスにより焦点を絞り悪と苦しみについて論じているのは C.Chalier の「La persévérance du mal」, Cerf, 1987、「Pour une morale au-delà du savoir」, Albin Michel, 1998.を初めとする研究である。Chalier はユダヤ教に通じており、ユダヤ教の観点からの、レヴィナスとその悪の思想の解釈では第一人者である。ただ悪や苦しみの主題を、他者の苦しみへの共感、救いといった着地点が予め描かれている感があり、レヴィナスにそういった側面もあることは否めないにしても、悪や苦しみの具体的かつ救いのない経験そのものに十分とどまり、考察する姿勢にやや欠けている。

(3) 倫理学において応用倫理研究は、昨今、医療、環境、情報、技術など多岐の分野

に及び進展しているが、従来の高度に抽象的な理論的研究と、極めて具体的、実践的な応用倫理研究とが区分され、別々の領域で展開されることが多かった。とくに医学をはじめとする各専門分野のなかで倫理的判断を迫られる主題に関して、哲学・倫理学者が介入して、あるいは問題の論理的整理を行い、あるいはひとつの判断を提示するという形式が主流であった。

2. 研究の目的

(1) レヴィナス思想の初期から晩年にわたって、一貫して、主体の「苦しみ」が他なるものとの関係にとって不可欠な役割を果たしていることを示す。

(2) レヴィナスにおける、苦しみと悪との関係を検討することで、悪を、それを被る苦しみに沿って考察する視点を導く。

(3) レヴィナス研究から得た (1) の考察をもとに、悪と苦しみという視点から見た、他なるものとの関係の倫理的考察を広範に展開する準備を行う。

(4) 「悪と苦しみの倫理学」と題する、代表者の長期にわたる広範な研究構想の基礎を固める。具体的には、この主題に関するレヴィナス思想の理論的研究をひとまず完成させ、他方、実践的研究に関する方法論を確立し、具体的な実施計画を立てる。

3. 研究の方法

(1) 理論的研究においては、まずレヴィナス思想に重心をおいて、悪や苦しみと他なるものとの関係を、主体の身体性にとくに注目しつつ考察する。その際、従来手薄だった、レヴィナス思想におけるヘブライズムについても詳細に検討する。それらの成果を基に、フランス思想を中心として、より広範な研究へと進展させる。

(2) 実践的研究においては、まずフィールドワークを実施するための方法論の研究を、社会学や心理学、人類学の質的調査法の文献や実際の事例もとに研究する。それをふまえて、本研究課題にふさわしい研究方法を検討する。さらに、フィールドの選定や事前調査を含めた具体的な実施計画を練る。

4. 研究成果

(1) レヴィナス思想において主体の「苦しみ」が、単なる主体のひとつのあり方にとどまらず、その成り立ちからしてすでに他な

るものと関わり、むしろそれを被らざるを得ない、主体の身体的存在様式をあらわにするものであることが明らかになった。これによって、レヴィナス思想の中心主題である、他なるものとの関係について、これまでにない新たな考察の切り口を提示することができた。

これらの主題に関して、従来、一種の苦しみとして注目されていた「傷つきやすさ」を扱った後期だけでなく、レヴィナスの初期から晩年に至るまで横断的に研究することによって、苦しみは、表立って論じられていない場合でも、レヴィナスの思想を貫いて、根本的な役割を果たしていることを示した。

(2) 理論的研究におけるレヴィナスの研究をひと通り完成させ、博士論文「レヴィナスの主体における他なるものとの関係について— 超過と身体 —」(2007年、東京大学大学院人文社会系研究科に提出)にまとめることができた。

(3) 「他者」、「他なるもの」、あるいは「他なるものとの関係」という、哲学的、倫理的に重要な主題を、主体の身体性の観点から徹底して考察する有効性を示すことができた。さらにその主体の身体性は、何よりも苦しみを被る際に際立つレヴィナス思想研究から得られたこの成果は、今後「悪と苦しみ倫理学」を広範に展開していく際の軸となるものと期待される。

また、苦しみを悪と結びつけて考察することで、悪を、客観的かつ不偏的視点から規範に沿って判断するのは異なった、個々の身体的存在が被る苦しみに徹底して寄り沿って考察する視点を、レヴィナスやナベールの思想に基づいて提示することができた(「悪と超越—レヴィナスとナベール—」、『論集』、東京大学大学院人文社会系研究科・文学部哲学研究室、第25号、23-37頁、2007年を参照)。それを通じて、他なるものとの関係における身体、苦しみ、悪との分ち難い関係を明るみに出した。

(4) 「悪と苦しみ倫理学」という一貫した主題のもとに、レヴィナスを基点としつつも縦断的哲学・倫理学研究を行うことは、一つの強い問題意識のもと、散漫にならずに、様々な哲学を考察の材料とする、新たな哲学・倫理学研究になる可能性があること、また主題自体が、今後様々な方向に発展させる可能性を秘めていることを示すことができた。

(5) 実践的研究に関して、広く倫理学、社会学、心理学、人類学にわたる文献を国内外から収集し、分析して、本研究課題に適し

た方法や手順、分析の仕方を探究するとともに、今後本格的に展開するフィールドワークの具体的な構想を練った。その際とくに、理論的研究と実践的研究を単に並行して行うのではなく、悪と苦しみという主題をめぐって両者が緊密に関連し、補完しあう研究方法の探求に力を入れた。

その結果、苦しみや、苦しみの観点から見られた悪という主題は、他の主題にもまして、理論的研究にとどまらず具体的、現実的現象や事例に基づいて考察する必要があるため、倫理学において、すぐれて文献研究と実践研究を有意味に結びつける主題のひとつであることが分かった。それにより、応用倫理学研究において、文献研究と実践研究が、相互に連携し補完しつつ、ひとつの主題を解明する新たな研究方法を見出すことができた。それは、哲学的、倫理学的問題設定から出発しつつも、その主題を具体化し現実と結びつけるために社会学的調査方法を採用する、哲学者・倫理学者にしかできない研究方法であると言える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

①中 真生、「レヴィナスにおける主体の両義性(ambiguïté)について」、日本現象学会、『現象学年報24』、61-68頁、2008年、査読有

②中 真生、「ヨーロッパにおける他者の思想—レヴィナスの「創造」をめぐる考察を軸に—」、日本シェリング協会、『シェリング年報』、16号、25-39頁、2008年、査読無

③中 真生、「悪と超越—レヴィナスとナベール—」、東京大学大学院人文社会系研究科・文学部哲学研究室、『論集』、第25号、23-37頁、2007年、査読有

④中 真生、「苦しみと希望—レヴィナスの思想から—」、『緩和ケア』、Vol.17 No.5、2007年9月号、青海社、407-410頁、2007年、査読無

⑤中 真生、「主体の被造性(créaturalité)—依存における自律—」、哲学会『哲学雑誌121巻793号』、57-80頁、2006年、査読無

⑥中 真生、「苦しみの意味を求めて—レヴィナスにおける悪と苦しみ—」(改訂増補版)、科研費報告書(基盤研究(B))、「事実・行為・規範をめぐる知識の実践的意義の研究—『自然と人為』の対比についての哲学的再検討」(松永澄夫代表)、2006年、98-109頁、査読無

〔学会発表〕(計2件)

①中 真生、「ヨーロッパにおける他者の思想 — レヴィナスの「創造」をめぐる考察を軸に—」(シンポジウム「ヨーロッパ」の提題)、日本シェリング協会、日本女子大学、2007年12月9日

②中 真生、「レヴィナスにおける主体の両義性(ambiguïté)について」、日本現象学会、大阪大学、2007年11月11日

〔図書〕(計2件)

①中 真生、「人格」、「責任」、「他者」(「概念と方法」)、飯田隆他編、『岩波講座 哲学 6 モラル/行為の哲学』、岩波書店、2008年所収、246-252頁

②中 真生、「苦しみの意味を求めて — レヴィナスから見る悪と苦しみ —」、熊野純彦・麻生博之編、『悪と暴力の倫理学』、ナカニシヤ出版、2006年所収、48-68頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中 真生 (NAKA MAO)

神戸夙川学院大学・観光文化学部・准教授
研究者番号：00401159

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：